のであつた。記憶の努力は、實に、人物そのものゝ如何によつて、有效ともなり、また無效ともなる。素養と餘裕とのある人には、記憶は特別な努力を要するまでもないので、一度見たり、聽いたり、感じたりしたことが、休止的記憶――乃ち、忘念――となつて、心中のどこかに祕んでゐて、機に應じて聯想されるのである。深い淵には、樹木のかげも深く映つて、これを拔き取り難いと同じわけだ。何の連絡もなしに。諸觀念を別々に覺えてゐようとするのは、初學者でなければ、世の所謂『物識り』に過ぎない。僕は、『鯖』といふ字を思ひ出さうとして、頭を叩いてもがいた人に出會つたことがある。かういふ習慣の人に限ぎつて、ただうはッ面の記憶の爲めに精神がかたついてゐるので、主義も、定見も、品性も、發達することは出來ない。

不自然で無關係の記憶は、實用眞理的に云ふものでもなく、その人を害することこそあれ、何の役にも立たいのだ。そんな記憶が休止的狀態になると、直ぐ忘却されてしまつて、再び聯想されることが出來なくなるのだ。まだ忘却されるなら幸ひだが、いつまでも殘つて他の觀念の邪魔をすることが多い。之に反して、素養と餘裕と趣味とを備へてゐる人物



の忘念――忘却にあらず――は、活動的記憶といつも相融通して、その人の精神の糧食となつてゐる。俳優が舞臺に登るには、どうしても臺詞を覺えて出なければならないが、ただその文句を覺えるだけなら、擧動と發聲とに拘泥するから、扮してゐる人物の表情が甘く行かない。その甘く行かないのは、臺詞を不斷の素養に連絡させて、之を忘念中から自然に呼び出すだけの餘裕を、自分の記憶に與へて置かないからである。つまり、その事に當らない前から、不斷、精神を養つて置くことが肝要だ。わが國の國樂家も大抵この用意が足りない。これは、西洋の樣に、樂譜なるものがあつて、それを見て彈奏するだけの便利がないので、敎はつた通りを眞似て行く傾きがあるから、入らないところにエネルギを費してゐる。然し、名人になると、樂譜があらうが、なからうが、自由自在にやることが出來る。これは、活動的記憶と忘念とが、たとへば電氣の諸色が巧みに入れ變はつて、芝居の舞臺面を飾る樣に、天才の活力を中心として、微妙に相融通するからである。

## 第六節　記憶の過剩と冷靜

この融通力、これが各個人の生命になつてゐるのだ、だから、この生命から云へば、心の表裏の區別を立てる必要もないし、また、記憶と忘念との名稱を必要ともしない。個人に全體が乃ち微妙不可思議の記憶である。天才は最も微妙な記憶のかたまりだから、その心は宇宙の最深奥所を住み家として、そこから無限遠大の妙響を引き出すことが出來るのだ。この形容をもつと實際的に云ふと自我の充實をいつも僞はることだ。然し、天才は記憶の範圍が深大であるだけ、その活動的狀態を年中つづけることが出來ない。天才も人間である以上は、記憶の過重——云ひ換へれば、腦の食傷——を來たして、例の狂氣になり易いのだ。墺太利近世の畫家マカトは、餘程奇體な天才で、その作には風俗畫が多くッて、わが國の浮世繪と同じく、上品なところはないが、女性を畫くことなどはなか〳〵巧みであつたらしい。その作で、『ダイヤナの狩獵』と題する畫の寫眞を見たことがあるが、裸體描寫の工合などは餘程巧みなものであつた。この人は普通の畫家の樣にモデルは使はない——いや、使はないのではない、段々使はなくてもよくなつたのだ。自分の遭遇した婦人は、すべて之を記憶が忘念の妾宅にかこつてあるので、入用な時は、之を自分の目前に呼び出



し、いや、お前ではないと云ふと、直ぐ引ッ込んで別なのと入れ更るから、その思ひ出す姿を——肥えたのでも、痩せたのでも、——自由に意に應じて使ふことが出來た。然し、この狀態があまり烈しくなつて來て、記憶と忘念との融通力が度を失つてからは、用もないのに澤山のモデルが目前に攻め寄せて來るので、うるさくッて、あても立つてもゐられず、それが持病となつて、褥中の枕につッ伏しても、前後左右からモデルの影は攻め掛けて來た。つひに、もう逃げるところがないと言つて、このデカダン藝術家は死んでしまつたのである。

然しこのマカト位の熱心と素養とがなければ、僕等の經驗は本統に深い活動的記憶にも休止的記憶にもなつて呉れないのである。犬が臺所へ骨をしやぶりに來る、それが厭といふ程あたまを打たれても、翌日はまた平氣でやつて來る。人間の馬鹿もこんなものであらう。馬鹿や一般女に靈魂がないとワイニンゲルがいふのは（靈魂なる架空物は、もッとも賢者や聖人にもない筈だが）、つまり、記憶がないと云ふべきである。この有樣では、進歩もなければ、向上もない。苦痛もなければ、覺醒の時もない。たとへ生死を同一と觀ずる

時があるとしても、生のがはにある間は無論僕等のいのちはある。記憶と忘却とを一つに念ずる時でも、同じくいのちはある。このいのちとは全體何だ？　プラトンの如き外存的靈魂や觀念を信じない僕には、經驗を確保して行く自我その物の外はない。そして自我がさきに圖でも示した通り、記憶の根柢でもあるし、また、記憶その物でもある。だから、假りに活動的と休止的との區別を立てたにしろ、之に接觸し、之を包括してゐる個人でなければ、その經驗は精神の滋養にもまた心の焚き木にもならないのである。

諸君のうちに、坐禪をやつて見た人があるだらうか？　結跏趺坐の體になると、先づ自分は浮世の業務から離れて、どこか閑靜な山奥へでも旅行に來た樣な氣になつて。心は現實界から遠ざかる。さうすると、今度は、元の現實界の事實や觀念が、おぼえてゐるまゝに夢の樣に目の前に群がつて來る。つらかつたことも出て來る、をかしかつたことも見えて來る。自分の左右を『悲み』が橫切つたり、『樂み』が跳ね飛んだりする。獨禪では、思ひ出し工合に依つては、わざと頸をすくめて見たり、わざと舌を出して見たりすることもないではない。やつてゐる學問のことや、考へてゐる目的や、戀しい人の面影などが、拂はうと



しても、入更り立ち更り、心のうさから浮んで來る。前に云つたマカトのモデルの樣に、妄想が攻めかけて來て、一時にうるさくなる時が、坐禪の心境に這入る初めであつて、この妄想は、盛んに燃えて來る情慾の靜まつて行くと共に、消滅するのが普通の順序らしい。それから、思念力は全く心中に向ふのだ。この時の心持ちは、禪家のよく說明する通り、頭上に落ちた一滴の油が、段々ひろがつて行つて、おのづから耳を濕ほし、肩を滑り、終には全身五體が油に染み渡る樣な狀態である。

所謂『無念無想』の境界だが、これは必らずしも禪信者どもが考へるやうに思念力が全くなくなつたといふ譯ではない。さう云へば、禪家はいろんな論法を以つて反對する道はあるだらうが、全く思念がない狀態は、純然忘却の場合と同じで、死でなければほんの假定に過ぎないのである。僕等は死といふことさへ、絕對の意義に於ては否定するのだ。生死の問題は僕等が宇宙に存在してゐる實際を可否する問題ではない。忘念は矢張り廣い意味の記憶だと云つて置いたが、その記憶なる物が承認される以上は之を離れた者があるとすれば、宇宙若しくは自我以外に脫却したものと見なければならない。これは、ニネルギを

持たない物質を假定すると同じで、實在物ではない。だから、この無我無心の狀態とは、僕のいふ休止的記憶、卽ち、忘念が最も密接に宇宙の最深奥所若しくは自我の充實境に住してゐる時を云ふのである。この狀態は、太陽の白光を根柢から見たので、明暗の差別を立てるには及ばなくなるのだ。宇宙その物が自我と同體で、記憶の原因は乃ちその結果である。近世哲學の開祖デカルトが『われ思念す、故にわれ存在す』と云つた通り、われなる物の存在力たる思念を確かにするのが、乃ち、記憶を善くする道である。

思念の力は强いものであつて、これが、かの佛蘭西表象派の諸詩人の樣に、神經の鋭敏な感想中に働くと、自然の內的事物が幻影となつて理はれて來る。かう云ふのが隱約であつて而も熱烈なヱルレン一流の詩である。ところが、催眠術の中にも、『水晶的凝視』といふ面白い事實があつて、福來博士もその催眠心理學の一原理に數へてあるが、何か物を置き忘れ、またしまひ無くした時、コップか茶碗に盛つた水の中を視てゐると、その忘れた物——たとへば、指輪——のあるところが、小さくはッきりとそこに映つて見えるのだ。外國で、或婦人が之を行ふ時いつも、その目的物の外に、高い垣根をめぐらした、奇麗な花



園を水の中に見たので、別段不思議だとも思つてゐなかつたが、暫く經つて或人を初めて訪問して行くと、その家の庭が丁度その幻影的事實と同じであつたので、歸つて來て母に之を話すと、この婦人が二歳の頃よく抱かれて行つたところであるのが分つた。乃ち、その頃の經驗が潛在的觀念となつて存在してゐたのである。之を見ても、ヂケンスの生れて二年目の記憶もまんざら信じられぬことではないのだ。

## 第七節　僕の忘念術

そこで、僕一個の行つてゐる記憶法を云つて見るが、一たび印象を受けたることをすべて同時に又いつでも覺えてゐようとはしないのである。前にも云つた通り、語學研究時代には、忍耐力の增進を喜びつゝ、六ケしい國語などを勉强したり、また、友人の宿所姓名などを暗誦してゐるのを得意としたが、今では隨分多忙な身になつて來たから、友人の宿所などは、姓名のアイウエオ順に竝べて、手帳に控へて置く。宿所などは控へて置きさへすれば、別に覺えてゐるには及ばないのだからだ。哲學めいた書物を讀む時はその貫徹し

てゐる道理の道すぢを辿つて行つて、それが分つてしまへば、外形は愚か、その書の內容すべてを忘念の狀態にして置くのだ。さうすると、必要な時は、おのづから呼び出して來ることが出來る。つまりその時に出せないほどのは實用の役に立たぬのであるから、思ひ出せないで損をしたのでない。いつも充實した自我を中心としてゐれば、そこに吸收する過去は現在と同じである。

これは尤も哲學書ばかりではない、どんな書物を讀んでも、どんな事を見聞しても、成るべく自分の生命に同化して、自分が根本の思念力によつてその存在をつづかせるつもりなのだ。だから、無用無效能の記事や事件は經く淺く受けてしまつて、他の休止的記憶の邪魔にならないやうにしてしまう。讀んだもの丶最も粹な個處を一度は深く記憶に止めて、その後は之を休止的狀態にさせて置くのだ。さうすると、いつも思ひ出し出されても同時に、活動的狀態の働きをも——邪魔をしないで——强くするから、僕等の頭腦の力が自由に發展することが出來るのだ。詩や小說に志す靑年には、兎角、理窟めいた物を讀むのは害になると云ふ傾向——寧ろ弊害——がある。それは、身づからその人物の偉大にならうとするのを停止すると同前で、他日に於て無定見、無主義、無意志、つひに薄志弱行の小文學者が澤山出來る前提である。僕等の人物が大きければ大きいだけ、周圍と見聞と同化する力も大きくなる譯であつて、レオナドやミケランジエロの樣に、手も八丁、口も八丁、而も何を遣らしても、立派に出來るといふ樣な偉大な天才は、最も望ましいではないか？



僕は前に人物の如何によつて云々と云つたが、實に自分の獨得——乃ち、個人生命の根柢——が深く大きくなるに從つて、記憶の範圍も深く大きくなるので、多讀の爲めに自分を發揮する力がなくなる樣な意氣地なしは、この激烈多忙な現代の生活には適しない。そんなことでは、天才は愚か、凡人の存在もおぼつかいのである。現代生活狀態に堪へて、而も天才を發揮して行かうとするには、社會萬般の事柄を經驗又は見聞すると同時に、僕の所謂忘念術を有效に實行して行かなければならない。さうすれば、その知識が博大になると共に、兎角博覽强記の人にあり勝ちな無趣味、無根柢、無獨得の片輪者は生じないのである。

# 刹那哲學の建設了

著作權所有
檢印
著者
隆文館

大正九年十月一日印刷
大正九年十月五日發行

著作者 岩野泡鳴

發行者 隆文館株式會社代表者 松野鶴平
東京市京橋區銀町一丁目二番地

印刷者 檜山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 友文社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發兌元 隆文館株式會社
東京市京橋區銀町一丁目二番地
電話銀座一七八〇番
振替口座東京八五三番

刹那哲學の建設與附　定價金貳圓八拾錢

故岩野泡鳴先生著

【最新刊】

# 悲痛の哲理

四六判六百卅六頁
布製天金函入美本
定價金參圓八拾錢
郵送料拾八錢

著者は本書に自ら序して曰く『僕の著たる新自然主義・半獸主義の兩者を一層具體的に說明したものは悲痛の哲理である。また僕獨得の哲學なる刹那充實主義・肉靈合致の優强自然獨存的人生觀としての悲痛の哲理を一貫させて發想させた云々』……斯く本書は生前著者の作品全體を通じて根底の思想を成せる所謂著者獨自の境地たる『悲痛の哲理』を以て第一と定め。また最も能く現代人に宣傳され、所謂靈肉一致の言行を無遠慮に實現し得て殆ど一世を驚倒せしめ根强き自我の發露たる『半獸主義』と『新自然主義』の三部を新に合冊するを得たり。依て以て泡鳴氏の言はんとする所は悉く本書に竭さる。

曹洞宗布教師
修養世界主筆

菅原洞禪先生著

最新刊

# 改造の基礎

四六判洋布製
三七〇餘頁
定價金貳圓五拾錢
送料金拾貳錢

## 佛教文化の宣傳

頑迷不靈なる舊時の世界は倒れて萬人悉く社會の改造を祝福せざるもの無しと雖も其の思想たるや紛々として歸趣に迷はんとす。是れ實に現代の苦悶にして精神界の一大病源なり。而して著者は熱烈なる信仰の人、毎に力の修養を外に宣傳して痛快なる文明批評を試む、今や聚て江湖に薦む。

渡邊小羊先生著

●須く現狀打破を以て進むにあり

# 我等の進路

四六判三三〇頁
布製函入美本
定價金貳圓
送料金拾貳錢

**最新刊**

急激なる經濟組織變動の下に雜多の社會現象は若き惱みを呈しつゝ我等の進路は今何處に求む可きか、眞に意義ある實生活の上に全人格の樹立を示して社會、國家、修養、宗教の各篇に亙りて詳論せざるなき現代的好著を薦む。

堀江博士・深作教授・佐藤中將各講述
吉野博士・杉森講師・帝國教育會編纂

# 思想問題講演集

【最新刊】

四六判三百五十頁
布製函入最美本
定價金貳圓五拾錢
郵送料拾貳錢

我が思想問題の研究は各階級を通じて切實に是が研究を要望すれども、多くは外來思想の宣傳にして其の混亂日に甚しく、今や輕佻浮薄なる論議一世に横溢して眞個に純眞質實の研究を以て一代風潮の先驅者たり紛々たる所謂思想問題の歸趨を指示するの先覺なく學世滔々相率ゐて彷徨するの秋特に我國情に立脚し世思思想の眞髄を縱横剖判して透徹明快の論結を與へたる本最の出づる豈意義なからんや、苟も文化生活を憧憬する諸君は必ず一本を座右にして國家社會思想問題の根本解決を究めざる可からず、敢て薦む。

---

◎三浦關造先生著

# 日本道德と最近社會思潮

現代思潮の根本基調は言ふ迄もなく社會民主主義なり。然るに滔々其の物質的方面のみを云々して、根柢に横溢せる精神的意義を看過するの傾あるは偏狹も亦甚しと謂つ可し。著者は深く之を慨し、自ら社會民主々義の倫理的、藝術的、及び宗教的立場に立ちて日本道德を論評し、同胞の國民的覺醒を絶叫すると共に延いて現代教育の革新に論及す。眞に之れ獨創的一篇の國民道德史論たり。敢て世の指導者を以て任ずる爲政家宗教家教育家諸君の座右に薦む。

菊判二百餘頁
洋裝箱入美本
定價金壹圓七拾錢
送料金拾八錢

---

◎三浦關造先生著

# 教育文學十講

1國家（プラトー）
2御足の跡（ケンピス）
3大教育（コメニユース）
4エミール（ルツソー）
5石垣の妻（ペスタロツチ）
6獨逸國民に告ぐ（フイヒテ）
7人の教育（フレーベル）
8第一歩（トルストイ）
9民主主義と教育（ヂユエイ）
10士道（山鹿素行）

本書は著者三浦先生が前後七星霜を費して、親しく教多き古今東西の教育文學を閲讀し就中各時代の代表的寶典十種を精選して巧に其要領を紹介し一々精到なる批判を試みられたるものなり。

中判七百餘頁
洋裝箱入美本
定價金參圓貳拾錢
送料金拾八錢

◎ルツソー原著　三浦關造先生譯

縮刷

# 人生教育　エミール

ルツソーは近代思想の父である。而してエミールは其の代表的著作である。『自然に還れ』の一語を標傍して虛飾と情實に化石した當年フランス社界の病弊を剔抉して新教育法を提唱したるもの。幼時期、官覺的教育、智的教育、道德宗教教育、女子教育の五項に分ちて、形式を小說に假りたれば、興味津々の裡に讀み了ることが出來る。敢て大方の讀書家に薦む。

ポケット形
洋裝ソフト
八百數十頁
定價金貳圓參拾錢
送料金拾錢

◎エミールの姉妹篇!!　ロムブロゾー原著
三浦關造先生著

# 犯罪と遺傳　個性の教育

從來教育上の二大根本事實が玆に發見された。一は犯罪救濟に關する教育問題で、一は人類學上から個性の教育を促さうとする問題である。此の最も重要の問題は大犯罪學者ロムブロゾーに依つて宣言指導せられた。卽ち犯罪救濟に關する根本からの力ある正しい見解が發見されて、人類學上に立つた個性教育が唱導されたのである。本書は眞に彼が最後の名著たる『犯罪の原因と救濟』の譯書で、近代に於ける唯一の科學的人道的の一大名著である。敢て薦む。

菊判五百餘頁
總布綴函入美本
原著者肖像口繪入
定價金貳圓五拾錢
送料金拾八錢

◎文學士　鈴木暢幸先生著

# 國民文學史

著者曰く『我が國民文學の隆盛を期せんが爲には、先づ過去二千年の歷史を理解するを要す』と。本書は卽ち斯學に造詣深奧なる著者が、此の見地に基きて、我が國有史以來二千年の間に於ける文學上の變遷に就て、縱橫に其の批判の靈筆を呵して、一大文章をなせるもの、而も行文流暢、詳述明快、眞に斯界最高の權威書たるを失はず。玆に近時の好著として敢て世の諸賢に薦む。【第一編　上古の世＝第二編　奈良朝の世＝第三編　平安朝の世＝第四編　鎌倉幕府の世＝第五編　室町幕府の世＝第六編　德川幕府の世＝第七編　明治時代】

菊判六百五十頁
洋布綴函入美本
定價金四圓八拾錢
送料金貳拾四錢

## 最新刊

◎三浦關造先生譯　ウエルズ原著

# 新エミール

世界の大戰は、大戰と英國最近世史とを背景とせる、痛快なる社會改造小說を產出せり。ウエルズの新エミール卽ち是なり。創造的進步の敵たる舊教育を打破し、新教育の建設を主張する實に精到深緻、歐米最近の讀書界を震駭せる亦所以なきにあらず。ルツソーのエミールにより て、自然教育の妙趣を啓發せられたる吾等は、更に本書によりて、英雄的大天才兒の、熱烈なる社會改造の高唱に聽かざるべからず。

四六判約五百頁
洋布綴函入美本
定價金貳圓八拾錢
送料金拾六錢

◎ギヨー原著　稻毛詛風先生譯　◎三版

# 遺傳か教育か

遺傳か教育か。是れ現下教育界の最大問題也。若し一派の論者の如く遺傳を兒童教養上主要のものとすれば凡百の教育法立地に其の價値を失ひ、又他派論者の如く教育萬能を夢むとも嚴然たる遺傳の力は否み能はじ。此の岐路に立つ時具眼の士も迷ひ有識の士も惑ふ。本書は即ち之に解決を與へしもの。遺傳の教育的意義を明かにして遺憾なきと共に教育を社會的に研究して剩さず。新思潮に觸れんとする教育家は來つて深邃の洞察に聽くべし、思索を求むる讀書家は就て精到なる立論を見よ

菊判四百餘頁
洋裝口繪原著者肖像
定價金貳圓
送料金拾八錢

◎文學博士中島力造先生○足立栗園先生共著

# 社會德育及教化の研究

國民新聞批評

吾國史中社會德育及び教化の最も完全に行はれたるは、德川氏二百五十餘年の期間となす、此絢爛たる德川文化は物質的にも將た精神的にも社會を根柢より整理し其國民德化の方針を永久に定めたり、本書は即ち此等の現象の由つて來る所を究め且つ其實績の淵源たる可き諸宗教の內容及び諸德育家を批評せる者所述秩序的にして簡明一讀して克く複雜なる文明史の一般に通曉せしむ、好著と謂はざる可けんや。

菊判五百頁
總布綴美本
定價金貳圓五拾錢
送料金十八錢

【最新刊】

◎文學博士　谷本富先生著

# 改造されたる婦人訓

著者曰く、教育の革新、宗教の革新、道德の革新、この三つは國家社會興隆の由る所であつて、戰後諸般改造事業中の最大急務であると、本書はこの見地より、博士獨特の犀利なる靈筆を呵して、理論、比較、應用の三門より、縱橫に婦人問題を品隲し、今後婦人の適從するところを明示したるものである。苟も新時代に處せんとする婦人は勿論男子も亦來つて、此の新らしき所說に聽き、所謂思想の洗錬を要するであらう、敢て薦む。

四六版五百頁
總洋布綴美本
定價金參圓八拾錢
送料金拾貳錢

【最新刊】

◎本間俊平先生著

# 勞働と信仰

著者は山居廿年、所謂筋肉勞働者の集團に自ら投じて、幾多驚異の經驗に相遇し、異常の奮鬪的生活を試みたる人である、爾かも敬虔なる信仰の人として專ら勞働界の爲め實際的感化教養に從事せる人である。而して今や世道人心の日に非なるものありて、怠業、罷業等盛に行はれ、人心の動搖愈擴大されんとするのである、是非社會改善の徹底的解決を憂うるの士は最も內省的にして深味ある本書の如き必讀を敢て薦む。

四六判約三百頁
洋布裝幀美本
定價金壹圓七拾錢
送料金拾貳錢

文學博士 椎尾辨匡先生著 忽再版

# 文化の權威

■四六判三百餘頁
■布製函入最美本
■定價金貳圓
■郵送料金拾貳錢

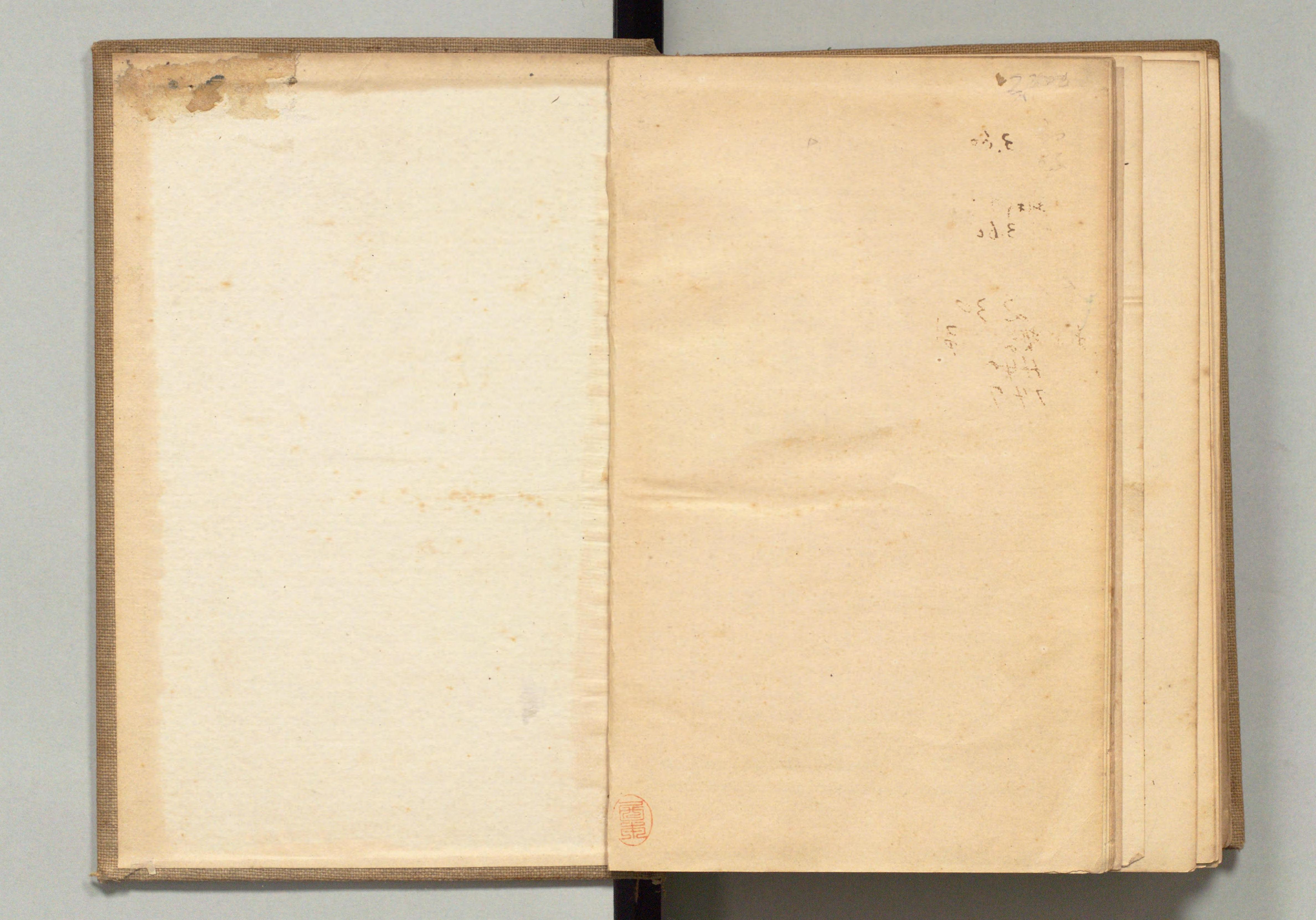
## 文化運動の中心思想

駸々として迫る社會改造の混流に臨みて今や著者は人類全體の和平と幸福とは凡て人間の自由と勤勞と義務の遂行に基くことを高唱し痛烈燃ゆるが如き胸底の心熱を專注し社會事態の根本に探究透徹して現代生活の誤謬を駁し迷者を教へて東奔西走して佛教文化の偉大なる宣傳と建設とに勤苦精進し最も新しき精神的教化運動の中心人物として社會奉仕の權化として卽に名聲を四圍に馳せらるゝのであるが其該切なる文化史的立論を披瀝して悉く本書に具體化確實化緊密化せられてゐる眞に文化を味識せんとする大方諸君の座右に薦む。


## 隆文館圖書目錄抄

### 宗教・哲學書類

| | | | |
|---|---|---|---|
| 文學博士 加藤玄智君著 | 宗教講話 | 金九拾錢 送料拾貳錢 |
| キルヘルム、フッセット原著 文學士 大川周明君譯 | 宗教の本質 | 金貳圓五拾錢 送料拾貳錢 |
| 文學博士 松本文三郎君著 | 宗教と學術 | 金貳圓五拾錢 送料拾貳錢 |
| 龜谷天尊君著 | 教育勅語と宗教 | 金壹圓 送料六錢 |
| シカ、トルストイ原著 小田賴造君譯 | 人道主義 | 金壹圓五拾錢 送料拾貳錢 |
| 文學博士 桑木嚴翼君著 | 現代の價値 | 金貳圓五拾錢 送料拾六錢 |
| 同 | 時代と哲學 | 金壹圓貳拾錢 送料拾六錢 |
| 文學博士 朝永三十郎君著 | 哲學と人生 | 金壹圓 送料拾貳錢 |
| 三宅博士、坪內博士、丘博士、外二大家講述 | 最新思潮講話 | 金壹圓 送料拾貳錢 |

## 隆文館圖書目錄抄

| | | | |
|---|---|---|---|
| 黑岩涙香君著 | 精力主義 | 金參拾五錢 送料六錢 | |
| 法學博士 浮田和民君著 | 倫理的帝國主義 | 金貳圓五拾錢 送料貳拾四錢 | |
| 菊池亮三郎君著 | 日本佛教外史 | 金四圓八拾錢 送料拾八錢 | |
| 高階龍仙師著 | 悟道の妙味 | 金壹圓八拾錢 送料拾貳錢 | |
| 江部鴨村君著 | 口語全譯 妙法蓮華經 | 金四圓五拾錢 送料貳拾錢 | |
| 江部鴨村君著 | 貧者の一燈 | 金壹圓七拾錢 送料拾二錢 | |
| 本間俊平君著 三浦關造君編 | 勞働と信仰 | 金壹圓八拾錢 送料拾貳錢 | |
| 英雲外君著 | 禪話 見る目かぐ鼻 | 金貳圓 送料拾貳錢 | |
| 日置默仙禪師著 | 現代生活と禪 | 金貳圓 送料拾貳錢 | |
| 原田祖仙師著 | 禪學問答 殺活自在 | 金貳圓 送料拾貳錢 | |